

新築 「砂のベッド」 牛舎を検証する

Y牧場は、昨年3月に400頭「砂ベッド」牛舎を新築した。積極的な初産牛の導入（合計130頭導入）によって、経産牛260頭（H27年1月）から400頭（H28年3月現在）までに増頭した。この新築「砂ベッド」牛舎の1年間の変化を見てみた。



新築 「砂のベッド」 牛舎

1. 牛群構成と乳量の変化

	初産牛	2産牛	3産以上	平均産次数	牛群平均乳検乳量
新築 前	30%	16%	54%	2.8産	37kg/日（管理乳量 37.7kg/d）
新築 後	51%	21%	28%	2.2産	35.5kg/日（管理乳量 37.6kg/d）

新築前の平均乳量が38kg/日であったものが、現在は平均35.5kg/日と一見、減っている。しかしながら、初産と2産目が牛群の72%を占める中では、およそ上出来とも言えるかもしれない。ただし管理乳量との比較からすると、ジャージー牛も含むとはいえ、もう少し伸びることを期待していたというのが正直な感想である。大きな理由としては、やはり130頭もの導入牛の中には、極端に乳量の低い牛が相当数含まれていて、現状これらを処分することなく、順次妊娠牛となって保有していることが大きいように思われる。しかし、1年後・2年後には、これらから選抜された主力が3産から4産になることは明らかであって、自然なかたちで新築前以上の平均乳量水準になることが予測・期待されている。

2. 搾乳頭数と体細胞数の変化及び乳房炎発症の減少

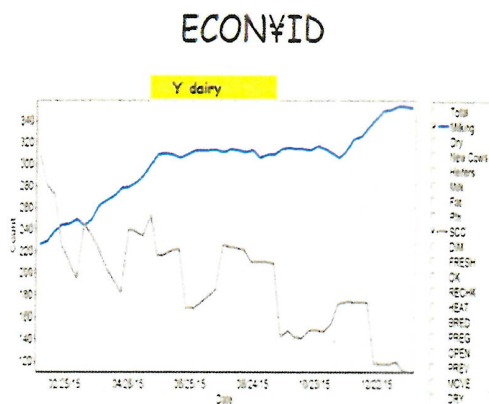


図1 体細胞平均 28・30 万から 10 万/ml へ

「砂のベッド」牛舎のもっとも、有効な分野が「体細胞数&乳房炎」に関するものである。図1は、搾乳頭数の増加と体細胞数の低下を顕著に示している。乳房炎の発症も減少している。今後は、砂の入れ替えなどそのメンテナンスがより重要になってくる。

3. 繁殖（妊娠率）成績の向上

繁殖状況に大きな変化が現れた。それまでの過去における平均妊娠率は18%を維持するのがやっとであったが、今は21・22%（直近）までに改善している。

	発情発見率（全体）	受胎率（全体）	妊娠率（全体）	空胎日数
新築 前	60%	30%	18%	150 日
新築 後	57%	37%	21%	130 日

発情発見率は、変化ないかむしろ低下気味であるなかで、受胎率が大きく改善しているのが分かる。空胎日数では、ちょうど1サイクル（周期）短縮している。初産・2産牛が多いので当然その影響によるものではないのかと思われるかもしれないが、実際には初産・2産牛以上に経産牛群の受胎率向上がみられている。

	初産&2産牛群	3産以上牛群
新築 前 受胎率	34%	27%
新築 後 受胎率	39% (+5%)	34% (+7%)

初産・2産牛群が、5%の伸びに対して、3産以上群は7%の伸びを示している。理由としては、牛の安楽性の向上と「砂の牛舎」特有の通路が滑らないことなどが大きな要因かと考えている。事実、蹄病に罹患する牛が大幅に低下している。農場における様々な要因によって、「砂のベッド」牛舎を選択することは困難なことが多いものの、「砂のベッド」牛舎は、牛にとって：農場の経済にとって、極めて有効な牛舎であることは間違いのないことのようにだ。

黒 崎